

新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいにしょう

じっせん

第二章 実践

じやつこうど

寂光土

いま にちれんとう たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、

けじようそくほうしよ

われ

こじゆう

せんごくこうや

みな

かいじようじやつこう

化城即宝処なり。

我らが居住の山谷曠野、皆、皆常寂光

ほうしよ

の宝処なり

おんぎくでん

(095 御義口伝

じやつこうど

寂光土

1024

ページー3行)

ほけきよう たも たてまつ ところ どうけいどうじよう

法華經を持ち奉る処を、「当詣道場」と云うなり。こ

さ い どうじよう

こを去ってかしこに行くにはあらざるなり。「道場」と

じっかい しゅじよう じゅうしよ い いま にちれんとう たぐ

は、十界の衆生の住所を云うなり。今、日蓮等の類い、

なんみようほうれんげきよう とな たてまつ もの じゅうしよ せんごくこうや

南無妙法蓮華經と唱え奉る者の住所は、山谷曠野、

みな じゃつこうど どうじよう

皆、寂光土なり。これを「道場」と云うなり。

おんぎくでん

095 御義口伝

じゃつこうど

寂光土 1086 ページ 2 行

ほけきよう だいしようにん ぶつぼう たも しゅじよう ばしよ どうけい

法華經（大聖人の仏法）を持ち修行する、その場所を「当詣

どうじよう しゃばせかい さ ごくらくじようどう たど

道場」というのです。この娑婆世界を去って、極楽浄土等の他土

い

どうじよう

じっかい

しゅじよう

じゅう

へ行くのではありません。道場とは十界をそなえた衆生が住す

なんみようほうれんげきよう

とな

にちれん

るところをいうのです。いま南無妙法蓮華經と唱える日蓮とその

もんか じゅうしよ

やま

たに

こうや

門下の住処は、それが山であり、谷であり、広野であつても、すべ

じやつこうど

どうじよう

て寂光土です。これを道場というのです。

にちれん なん 遭 ところ ぶつど しやばせかい なか

日蓮が難にあう所ごとに仏土なるべきか。娑婆世界の中

にほんこく にほんこく なか さがみのくに さがみのくに なか

には日本国、日本国の中には相模国、相模国の中には

かたせ かたせ なか たつ くに にちれん いのち 留 置

片瀬、片瀬の中には竜の口に日蓮が命をとどめおくこと

ほけきよう おんゆえ じゃつこうど

は、法華經の御故なれば、寂光土ともいうべきか。

しじようきんごどのごししようそく

192 四条金吾殿御消息

じゃつこうど

寂光土 1516 ページ 17 行

にちれん なん ところ ぶつど しやばせかい なか

日蓮が難にあう所は、みな仏土といえるでしょう。娑婆世界の中

にほんこく にほんこく なか さがみ くに さがみ くに なか かたせ

では日本国、日本国の中では相模の国、相模の国の中では片瀬、

かたせ なか たつ くに にちれん いのち

片瀬の中では竜の口に、日蓮が命をとどめておくということは

ほけきよう

じゃつこうど

法華經のためですから、そこは寂光土であるというべきです。

されば、われ 我らが居住して一乗を修行せんこじゅうの処いちじょうは、いず
ところれの処そちらにても候え、常寂光じょうじやつこうの都みやこなるべし。

(278 最蓮房御返事 さいれんぼうごへんじ)

寂光土 じやつこうど
1784 ページ 3 行

そ

じょうど

じごく

ほか

そうら

夫れ、浄土というも、地獄というも、外には候わず。た

われ

胸

あいだ

覚

ほとけ

だ我らがむねの間にあり。これをさとるを仏という。こ

迷

ぼんぷ い

れにまようを凡夫と云う。

（297 上野殿後家尼御返事

うえのどののごけあまごへんじ

寂光土 ページー17行

じやつこうど

1832

じょうど

じごく

およそ、浄土といっても、地獄といっても、それはどこかほかのと

わたし

むね

あいだ

せいめい

なか

ころにあるわけではありません。ただ私たちの胸の間（生命の中）

さと

かた

ほとけ

まよ

ぼんぷ

にあるのです。これを悟った方を仏といい、これに迷うのを凡夫と

いうのです。

こころほそ

ゆうくつ

きようしゆしやくそん

いちだいじ

かかるいと心細き幽窟なれども、教主釈尊の一大事の

ひほう

りようじゆせん

そうでん

にちれん

にくだん

きようちゆう

ひ

秘法を靈鷲山にして相伝し、日蓮が肉団の胸中に秘し

かく

たも

にちれん

むね

あいだ

しよぶつにゆうじよう

ところ

て隠し持てり。されば、日蓮が胸の間は諸仏入定の処

した

うえ

てんぼうりん

ところ

のど

たんじよう

ところ

こうちゆう

なり。舌の上は転法輪の所、喉は誕生の処、口中は

しようかく

みざり

ふしぎ

ほけきよう

ぎようじや

正覚の砌なるべし。かかる不思議なる法華經の行者の

じゆうしよ

りようざんじようど

おと

住処なれば、いかでか靈山浄土に劣るべき

(340 南条殿御返事 (法妙人貴の事))

なんじようどのごへんじ

ほうみようにんき

こと

じやつこうど

寂光土 1924 ページ 2 行

じごく

ほとけ

ところ

そうろう

尋

そうら

そもそも地獄と仏とはいずれの所に候ぞとたずね候

ち

した

もう

きょう

さいほうとう

えば、あるいは地の下と申す経もあり、あるいは西方等

もう

きょう

そうろう

いさい

そうら

われ

と申す経も候。しかれども、委細にたずね候えば、我

ごしやく

み

うち

そうろう

見

そうろう

らが五尺の身の内に候とみえて候。

むしもちごしよ

(390 十字御書

じやつこうど

寂光土 2036 ページ 10 行)

じごく

せかい

ほとけ

せかい

いったい、地獄の世界や仏の世界はどんなところにあるのかとた

ち

した

じごく

と

きょうもん

ずねてみると、あるいは地の下に地獄があると説く経文もあり、あ

さいほう

せかい

ほとけ

す

と

きょうもん

るいは西方の世界に仏は住んでおられると説く経文もあります。

しかしながら、くわしくたずねていくと、
私^{わたし}たちの五尺^{ごしゃく}の体^{からだ}のな
かにあることがわかります。